

11. ICT(Teams および Ai-Map) を活用したリモート監理

Utilizing ICT Anchor on Thin Wall Building with Rammed Earth

福澤 良*¹ 佐藤 亮輔*¹ 本多 貴英*² 古東 秀文*³



写真-1 作業所全景



写真-2 遠隔での監理状況



写真-3 作業所と監理者のやり取り

□ 目的

施工中の超高層建物では、設計・監理者が大阪に在住していることや、コロナウイルスの蔓延により、従来までの作業所現地での検査が行い難い状況となった。そこで、検査工程の幾つかにリモート技術を活用することとした。これにより、今後の検査の効率化や生産性向上に繋がることを目的としている。

□ 概要

日本において生産年齢人口が減少することが予想されている。建設分野においては、建設作業者の減少とともに高齢化が進んでおり、生産性向上は避けられない課題となっている。国土交通省では、建設現場における生産性を向上させるために、建設現場へのICT技術の導入を政策として進めている。ICT技術の導入は、i-Constructionとの名前とその政策が進められており、建設施工現場へのICT技術の普及と共に、検査や監理にもその技術を取り入れることが挙げられている。

施工中の超高層建物では、設計・監理者が遠隔地に在席していることや、コロナウイルスの蔓延により、従来までの作業所現地での検査が行い難い状況となった。そこで、検査工程の幾つかにリモート技術を活用することとした。写真-2に示すとおり、監理者は遠隔地に在席し、タブレットやパソコンから作業所にいる監督員と通信を行いながら、検査を行っている。リモート監理では、製品の受入検査を中心に活用することとした。これにより、検査の一部をリモート監理に置き換えても、監理全体のレベルを確保できると考えた。

□ 結論

リモート監理では広範囲の検査では活用しづらいものの、その特性を活かした利用方法により、生産性の向上が図られる。また、ジャストタイムの検査が行えることから、検査の頻度を上げることができ、品質確保にも役立つと考えられる。また、検査以外のコミュニケーションツールとして活用も期待できるが、事前の通信環境の確認は必要である。

*1 名古屋支店建築部

*2 大阪本店設計部

*3 本社技術研究所

(執筆時の所属)